資料５

第１回　横浜市立図書館のあり方懇談会　議事

日時	平成１８年１０月１７日（火）　午後３時３０分から午後５時４５分まで
場所	横浜市中央図書館　第１会議室
会議次第	・開会挨拶 ・委員の紹介（資料１） ・事務局職員紹介 ・座長の選出 ・副座長の指名 ・懇談会の進め方について ・講演「日本の図書館の現状と課題」（資料４） ・「横浜市立図書館の現状と課題」（資料５） ・質疑応答 ・閉会挨拶
出席者	高山座長、井堀委員、伊藤委員、金指委員、金澤委員、マリ委員、小泉委員、寺田委員、廣瀬委員、吉岡委員、依田委員
欠席者	なし
進行	・座長に高山委員を選出し、副座長に井堀委員を指名した。 ・懇談会の進め方について事務局から説明し、今後の検討内容及びスケジュールの概略を確認した。 ・「日本の図書館の現状と課題」について高山委員が講演を行った。 ・「横浜市立図書館の現状と課題」について事務局から説明した。 ・高山委員の講演及び事務局の説明に関して、質疑応答及び意見交換を行った。 ・第２回懇談会は、１１月２１日(火)午後３時３０分から磯子区役所で開催することとなった。
意見	■高山座長講演「日本の図書館の現状と課題」について Q.レジュメに「市民の図書館：図書館から何をしてもらうかではなく、市民は図書館に如何なる貢献がなしうるか。」という記述があるが、市民の図書館への貢献ではなくて、図書館からの情報をもとにした市政への貢献なのではないか。 A.今回のあり方懇談会の枠の中で考えているのは、市民の図書館への貢献。その貢献で図書館のサービスがさらに充実してくる。それによって市民の市政への貢献ができるようになるのではないか。 Q.パソコンや携帯が非常に普及している、という話があったが、その一方で高齢者など情報の弱者がいるのも事実。図書館は全ての人に情報を提供するために存在するのだから、情報の弱者にも対応すべき。 A.そういう方たちへのケアはもちろん考えなければならない。ＩＴ時代ということになったときに、既存の図書館が消えてしまうことを私は想定していない。図書館から紙の本が消えることは何百年の間にはまずありえないし、図書館という施設がなくなることもまずないだろう。図書館に限らず、ある特定の場において、日頃親しい人たちが顔を合わせ、話をしあうフォーラムとしての場がなければならない。

	Q.「生涯学習施設にふさわしい指導的サービス」、という言葉はどのようなことか。 A.現在、図書館の利用指導（図書館リテラシー）が向上している。今まで図書館の世界は、支援サービス・補助的サービスに留めるべきである、という考えだったが、時間も経ってきているし、社会的な市民の意識も高まってきているから、そういう恐れは非常に低くなった。反対にいろいろと図書館で積極的に、利用者・市民に対して啓発活動を展開していかなければいけない、という考え方が出てきている、ということをこの「指導的サービス」と強調することで示している。 ■事務局説明「横浜市立図書館の現状と課題」について（●は委員のコメント） ● まずコスト削減、財政困難、というところから話が始まっているが、理想の図書館像をきちんと出して、市民と市の行政へもっとアピールするべきではないか。 ● 最終的に、この懇談会では報告書を提出する。報告書の中に書かれていることを多くの関係者に知ってもらうこと、多くの行政担当者、市民の両方に、いかに広く知ってもらうかということが大事。真剣に考えたい。 Q.受益者負担の可能性としてオプションサービス等を考えているということだったが、それはアンケートにある宅配サービスのことを指しているのか、それとも他に具体的なことを考えているのであれば教えてほしい。 A.アンケートの宅配サービスについての設問には、有償では不要という人が多かった。他のサービスも含めて、最終的にはどれをもって基盤のサービスで,どこからがそれ以外のサービスかという区分けをするかが難しいが、範囲を今後検討していかなければならないと思っている。 ● 具体的な内容はわからないが、図書館のサービスを考えるときに、基盤的なサービスと、より高度なサービスに分けて考える必要があると思う。基盤的なサービスをベースにした新たなサービスが、新しい社会的な状況に応じて開発されていかないと、図書館が世の中の動きから取り残されてしまう状況がある。 ● 利用者の要求はサービスが浸透することによってどんどん高くなるが、それが市民を育てるということだと思う。特に今、格差社会になっていて、お金が払える人ばかりではない。お金がないが情報がほしい、という人を支援することによって、その人が自立していくことを助けると、最終的には市民に貢献することになる。目先の費用を取ることによって人を育てない、というのは問題ではないか。 ● 資料の副題として「財政難のもとでの図書館サービスの充実」と付けているが、図書館だけがこういう状況ではない。何をやるか、というのがメインであって、その結果としていろいろとついてくると考えたほうがクリアになってくるのではないか。 ● 財政難ということであるが、景気もやや上向いてきたし、アピールもまだ足りない。楽観的に、景気が上向くという発想で考えていきたい。私たちの団体は、将来的には富裕層からお金を集めて、図書館に寄付したいという思いでやっている。 ● 図書館のアンケートについては、調査として出すならば、もう少し突っ込んだ形で出したほうが図書館の費用対効果が高いのではないか。たとえば、「図書館のボランティアをしたいと思わない」という項目があるが、その理由が示されていない。
資料	1 横浜市立図書館のあり方懇談会委員名簿 2 横浜市立図書館のあり方懇談会設置要綱 3 「横浜市立図書館のあり方懇談会」の進め方 4 講演「日本の図書館の現状と課題」資料 5 「横浜市立図書館の現状と課題」説明資料 6 平成１８年度横浜市立図書館ご利用者アンケート調査結果報告 7 「これからの図書館像」（文部科学省協力者会議報告書）概要

第２回　横浜市立図書館のあり方懇談会　議事

日時	平成１８年１１月２１日（火）　午後３時４０分から午後５時４５分まで
場所	横浜市磯子区役所　701･702 会議室
会議次第	・開会挨拶 ・前回議事の確認 ・講演「『これからの図書館サービス』を想像して」 ・講演「情報化時代の図書館」 ・論点の整理 ・質疑応答 ・閉会挨拶
出席者	高山座長、井堀委員、伊藤委員、金指委員、金澤委員、マリ委員、小泉委員、寺田委員、廣瀬委員、吉岡委員、依田委員
欠席者	なし
進行	・前回の議事を確認し、修正が必要な場合は事務局まで連絡することにした。 ・「『これからの図書館サービス』を想像して」のテーマで寺田委員が講演を行った。 ・「情報化時代の図書館」について廣瀬委員が講演を行った。 ・論点の整理として「図書館サービスの重点方向」のテーマで事務局から説明した。 ・寺田委員、廣瀬委員の講演及び事務局の説明に関して、質疑応答及び意見交換を行った。 ・第３回懇談会は、１２月１９日（火）午後３時３０分から中央図書館で開催することとなった。
意見	■寺田委員講演「『これからの図書館サービス』を想像して」について ●　図書館が「人を集める」とか「稼働率を上げる」とかいう話は意外だったが、よく言われるような中心市街地の活性化などに図書館を活用できたらいいと思う。 Q.横浜市内のアクセスが悪く、また、観光資源などが特定の区に集中していたりして、区ごとにかなりの偏りがあるが、横浜で市民が満足できるのに必要な図書館の数はどれくらいか。 A.伊万里市では６万人に１つの図書館を造った。地方では、従来、縦割りだった行政が所管を超えて協力するような仕組みが始まっており、横浜でもそんなことができれば良いのではないかと思う。 ●　何館必要か、という話では、以前に関っていた団体で、１００館構想を作って、報告書にまとめたことがある。当時の人口が約３００万人だったので、３万人に１館あればお年寄りでも子ども連れでも行けるだろうという考えだった。公共図書館を１００館造るのは大変だから、地区センター図書室などの図書関連施設をネットワークで結んで、図書館のサービスポイントとして活用すれば、今でもできなくはないと思う。 Q.地方と都市では、住民にとって図書館が持つ重みが違うのではないか。都市では書店も沢山あり、多くの人が携帯電話を使うが、地方では、書店も撤退し、高齢化が進んで携帯電話を使える人も少ない状況では、都市以上に図書館が頼りにされるのではないか。 A.地方も都市も変わらないと思う。供給があって需要が喚起されることが多いので、むしろ都会の方が、供給があれば爆発的な需要につながるのではないか。 Q.たらみ図書館が素晴らしいことに驚いたが、図書館はそれぞれの地域とどのようなネットワークを図っているのか。地域住民への必要なサービスはなにか。

	A.図書館の計画を作るまでのプロセスが大事だろう。たらみでは図書館を求める住民運動が始まってから、学校図書館との繋がりを作ったりして、人間関係・社会関係を築き、図書館の仲間を増やしていった。大都市でも、図書館の方向性や目標を決めたときには、自治体の中で他の部署から応援してもらうためにも「図書館はこういうことをしたい、こういうことができる」と旗揚げすることが大事ではないか。 ■廣瀬委員講演「情報化時代の図書館」について Q.地方と都市の距離の面や縦割りの面でネットワーク技術が果たせる可能性について聞きたい。 A.会社や役所の組織の中で、ＩＴをうまく使うことによって情報の流れ方を随分変えることもできる。縦割り組織だと全く情報の交換がなされないが、ＩＴを使うことでバーチャルな組織として特定の問題に関して近い部署同士が協力するようなことができると思う。 ■事務局の論点整理「図書館サービスの重点方向」ついて ● 図書取次サービスは、一部地域での取組ということもあり取扱件数は少ないようだが、一定の件数までは赤字が出ていても、プラスに転ずるだけの件数に達すると、民間がお金を払ってでもサービスに乗り込んでくるのではないかと思う。「物を運ぶ」サービスは人気が高いからコスト面ではいろいろな解決方法があるだろう。それよりも、まず考えなければいけないのは、「身近に感じられる図書館」を増やすことであり、そうなれば図書館がもっと生活の中に組み込まれていくことになり、最終的には未来の図書館に繋がっていくのではないかと思う。 ■その他 ● 自分たちは図書館に対して温かい人間関係を求めているのに、図書館の職員が３年くらいでどんどん替わってしまうので温かい人間関係を築くところまでいかない。無機質化していく横浜の図書館に危機感を感じる。たらみ図書館みたいな理想的な図書館が各区にできたら、利用者も集まり、非常に活性化していくだろうし、そうなって欲しいと思う。 ● 図書館の窓口でもある種の自動化は容認して、その分の時間を職員がおもてなしの心に振り向けられれば、温かい人間関係もできるのではないか。
資料	1 第１回 横浜市立図書館のあり方懇談会 議事 2 講演「『これからの図書館サービス』を想像して」資料 3 講演「情報化時代の図書館」資料 4 「論点の整理」資料

第３回　横浜市立図書館のあり方懇談会　議事

日時	平成１８年１２月１９日（火）　午後３時３０分から午後５時３０分まで
場所	横浜市中央図書館第１会議室
会議次第	・開会挨拶 ・前回議事の確認 ・前回テーマ「図書館サービスの重点方向」についての意見交換 ・講演「地方財政と図書館サービス」 ・図書館からの説明「地域図書館の運営方法」 ・質疑応答 ・閉会挨拶
出席者	高山座長、井堀委員、伊藤委員、金指委員、金澤委員、マリ委員、寺田委員、廣瀬委員、吉岡委員、依田委員
欠席者	小泉委員
進行	・前回の議事を確認し、修正が必要な場合は事務局まで連絡することにした。 ・前回テーマ「図書館サービスの重点方向」についての意見交換を行った。 ・「地方財政と図書館サービス」のテーマで井堀委員が講演を行った。 ・井堀委員の講演に関して、質疑応答及び意見交換を行った。 ・「地域図書館の運営方法」のテーマで図書館事務局から説明をした。 ・事務局の説明に関して、質疑応答及び意見交換を行った。 ・第４回懇談会は、２月２０日（火）午後３時３０分から中央図書館で開催することとなった。
意見	■前回テーマ「図書館サービスの重点方向」について　（●は委員のコメント） ●　地域図書館は横並びではない。図書館の側から呼びかけをして結成された都筑図書館ファン倶楽部は、市民と図書館職員の交流がうまく行っている例だと思う。 ●　よこはまライブラリーフレンドは中央図書館を中心に活動をしているが、地域館でもライブラリーフレンドや友の会等を地域の独自性を出して作れたらよいのではないだろうか。 ●　学校図書館と地域図書館とが子供たちのために連携して行ければと考えている。司書教諭や図書館主任と専門家の司書の方々が一緒に読書活動ができればよいと思う。 ●　小学生の時から図書館の使い方を教えていくことが大切だ。司書教諭だけではなく、一般の教諭の方の理解も必要だと思う。 ●　地域のコミュニティの中で安心していられる唯一の場所が図書館ではないだろうか。防犯や安全・安心といった観点からも、非常に重要なポイントだと思う。 ■　井堀委員講演「地方財政と図書館サービス」について Q.公共サービスは非常に評価しにくいということだが、評価しなければ次に進めないと思う。何か評価の仕方が実際あるのか、特に図書館に対しての評価はどうなのか、詳しいことがわかれば教えていただきたい。 A. 図書館も含めて一般的に公共サービスの評価は金銭的な評価ではなくほとんどが数値目標のレベルの評価。それぞれのニーズに応じて数値目標を立てて、そこが達成されるかどうか、達成する前にどのくらいコストを下げるかという形でしか評価できない。それぞれの行政サービスとしては評価できるが、行政サービス同士を相対的に評価できないため、現在は政治の判断で、図

	書館のほうが重要だと思う人が多ければ、予算が多くなる。 ■図書館からの説明「地域図書館の運営方法」について ● ボランティアを扱う管理者側の能力も重要。官僚的な考え方を押し付けてもボランティアグループは動かない。ボランティアされている方々の想い、お手伝いしたいという気持ちを、うまく活用する能力を持っていなければいけないと思う。 Q.大前提として経費を削減しなくてはいけないのか。これだけ充実したすばらしい人材がいるのなら、その方たちがさらにやる気をもってやっていける方向の話にしていくということはスタートから話にないのか。 A.限られた財源の中で、最適で質の高いサービスを提供するために、本当に現在のような形の公共サービスが良いのかどうか、というのが大前提。基本的には市民に向けて発表した財政見通しの中で市政運営をしていくということになるため、図書館としても人件費の抑制等を具体的に考えていかざるを得ない状況。 ● 窓口業務が非専門的業務と扱われているが、5年間カウンターから遠ざかると選書ができなくなり、レファレンスの瞬間的な判断ができなくてパニックになるという話を聞いている。窓口業務も専門的な職員が行えば、新しいサービスの開拓や選書につながるため、窓口業務イコール非専門的業務と切り分けるのは非常に疑問。 ● 先進的に委託をしているところの事例も深く学んでおく必要がある。 ● 横浜市立図書館の費用が削減された場合に、サービスが低下するのなら、予約図書が届くのに1週間だったものが1ヵ月になる等、具体的に数字やデータで出せば市民が納得する。図書館側から提示することで、一般の市民が応援してくれるのではないか。 ● 利用者の立場から言えば、横浜市の図書館全体のことを知っていて、地域の人や地域のニーズもよく知っている真のプロが運営した方が、効率的な管理運営ができると思う。 ● プロの集団をどういう形で運営・維持するのがよいのか、ものすごく難しいと思う。 ● 誰に一番人件費を払わなければいけないか、基準を作るべきだと思う。現役を退いたOBボランティアの方々が持っている能力を生かすこともできる。資料費については、寄付行為として本を市民に要求するのはどうか。寄付行為で３０００円程度であれば贈与にはならないはず。寄付された本の後ろに誰からの寄付か印刷したものを入れる。ボランティアの仕組みをきちんと構築し直すことも大切。 ● 市職員の退職後、普通の市民に戻ってボランティアとして働く、という考え方があってもよいと思う。 Q.司書が削減されたら、今までも十分でなかった学校連携等を強めて行くことができるのか。 A.司書の削減が目的ではなく、現在のサービス水準は落とさないのが前提。学校連携、児童サービスといった司書の専門業務は拡充していかなければならないと考えている。
資料	1 第2回 横浜市立図書館のあり方懇談会 議事 2 講演「地方財政と図書館サービス」資料 3 図書館からの説明「地域図書館の運営方法」資料

第４回　横浜市立図書館のあり方懇談会　議事

日時	平成１９年２月２０日（火）　午後３時３０分から午後５時３０分まで
場所	横浜市中央図書館第１会議室
会議次第	・開会挨拶 ・前回議事の確認 ・講演「図書館とボランティア活動」（マリ・クリスティーヌ委員） ・講演「図書館と市民との協働について」①（伊藤紀久子委員） ・講演「図書館と市民との協働について」②（金澤和子委員） ・講演「図書館と市民との協働について」③（依田和子委員） ・図書館からの説明「市民と図書館の協働」（横浜市中央図書館担当部長　中村昭彦） ・質疑応答
出席者	高山座長、井堀委員、伊藤委員、金指委員、金澤委員、マリ委員、寺田委員、廣瀬委員、依田委員、小泉委員
欠席者	吉岡委員
進行	・「図書館とボランティア活動」のテーマでマリ委員が講演を行った。 ・「図書館と市民との協働について」のテーマで伊藤委員、金澤委員、依田委員が講演を行った。 ・「市民と図書館の協働」のテーマで図書館事務局から説明をした。 ・質疑応答及び意見交換を行った。 ・前回の議事を確認し、修正が必要な場合は事務局まで連絡することにした。 ・第４回懇談会は、３月１２日（月）午後３時３０分から中央図書館で開催することとなった。
意見	（●は委員のコメント） ■図書館からの説明「市民と図書館の協働」について Q. 図書館と個人・ボランティアグループの繋がりだけでなく、図書館と行政の他部署との連携も重要だと思うが、どうか。 A. 今回は、図書館をステージとした連携・協働にテーマを絞って話をしている。すでに他部署との連携の事例は多数ある。子育て支援などは、今後、関係部局との連携をより強化していきたい。 ●　担当が代わると連携が切れる事例も多い。積極的に図書館の側から連携を提案してはどうか。その中で市民との協働も実現するのではないか。 ●　子育て支援に関しては、ぜひ福祉関係局区との連携を深めてもらいたい。 ●　講演で触れられた「協働」の概念に違和感があった。過去の横浜市のレポートでは、協働とボランティアは違うものと記述されていた。考え方が変わってきているのか。 ●　図書館経営のトップに立つ館長の専門性、意識がアメリカと横浜ではかなり違うと感じた。 ●　アメリカでの市民の図書館への支援は、ロビー活動、資金集め、政策支援であり、決して書架整理など、本来図書館員がやるべき仕事の手伝いではない。日本のボランティアは、おはなし会も図書修理も肩代わりできてけっこうな話ではあるが、自己学習、自己実現のためのボランティア活動とプロフェッショナルの仕事は違う。自らの専門性について図書館はどう考えているのか。 ●　「協働」「ボランティア」の位置づけが日本社会全体で多様に捉えられている面がある。 ●　ボランティアの育成より職員の育成をまずきちんと行うべき。プロの職員が考えた図書館のあ

	り方がまず提示されないと、市民との協働関係を築くのは難しいのではないか。 ● 図書館の意識が変わらないと協働の中身はふくらまない。今回の講演の中で提示されていた具体的な提案に対し、図書館はしっかりと応えて欲しい。 ● 活動発足時に参加する情熱のある市民がいなくなったあとも継続可能で、かつ参加した人が得をする活動にしていくことが肝要。 ● Wikipedia や Linux の例などもあるように、現代ではアマチュアのレベルが上がり、アマチュアとプロフェッショナルは対立概念ではなく包含概念に変化しているのではないか。読み聞かせなど、プロとしての司書の専門性と市民活動は確かに違うが、細かいレベルで考えると、市民の方が良く考えているということもあり得る。 ● ボランティアの導入により行政改革を目指す流れができているようだが、ボランティアの導入は、結局行政側の仕事を増やす方向に向かうという、過去の事例もあることを指摘しておく。
資料	・資料１　第３回　横浜市立図書館のあり方懇談会　議事 ・資料２　マリ委員講演「図書館とボランティア活動」資料 ・資料３　伊藤委員講演「図書館と市民との協働について」資料 ・資料４　金澤委員講演「図書館と市民との協働について」資料 ・資料５　依田委員講演「図書館と市民との協働について」資料 ・資料６　図書館からの説明「市民と図書館の協働」資料

第５回　横浜市立図書館のあり方懇談会　議事

日時	平成１９年３月１２日（月）　午後３時３０分から午後５時３０分まで
場所	横浜市中央図書館第１会議室
会議次第	・開会挨拶 ・前回議事の確認 ・意見交換「横浜市立図書館の将来像に向けて」
出席者	高山座長、井堀委員、伊藤委員、金指委員、金澤委員、マリ委員、寺田委員、依田委員、小泉委員、吉岡委員
欠席者	廣瀬委員
進行	・資料「委員発言要旨　－さらに討議を深めるために－」をもとに、「これからの図書館サービス」、「効率的な管理運営」に的を絞って、意見交換を行った。 ・前回の議事を確認し、修正が必要な場合は事務局まで連絡することにした。 ・第６回懇談会は、４月２４日（火）午前１０時から中央図書館で開催することとなった。
意見	（●は委員のコメント） 「これからの図書館サービス」 ■「場」としての図書館　について ●　横浜の図書館という意味での場を考える時に、横浜らしいアイデンティティがあってもいい。例えば国際性。インターナショナルな雰囲気を作り出す場としても大切。 ●　図書館は学校と家の間の中間地点として、本を軸として子どもたちと交流ができる場にできる。 ●　地域の人たちは図書館と積極的に関わりたいと思っている。さまざまな市民が図書館を場としてつながっていくのを目指してアピールしていくのが良いと思う。 ●　図書館は町の灯台になればいい。先行きが見えない社会の中で、市民のために情報を提供することによって、行く先を照らしてくれるような役割が図書館にはある。そのために場を大事にすることが大切。 ●　図書館はPR不足。図書館にとっては当たり前だが、市民にはわかっていないことがたくさんあるため、繰り返しアピールしていく必要がある。 ●　子どもたちが小さいうちから図書館に親しみ、生涯にわたって学ぶ場にできるようにしたい。子どもたちへの発信を区や市が行ってはどうか。おはなし会の開催時間を工夫して、放課後の子どもたちの足を向けさせたい。 ●　学校図書館と中央図書館が一緒に行った読書フェスティバルは大成功だったが、保護者に向けての宣伝不足を感じた。 ●　図書館のホールを使ったイベントを企画すれば、本だけではない、人と人のかかわりが生まれる図書館に変わっていくのではないかと思う。 ●　市民の視点から見た広報があっても良いのではないかという意見を聞いた。市民と図書館職員とがフランクなコミュニケーションができる場があれば、図書館が市民にとって身近なものになる。外国で行われている図書館での市民と職員の交流会もよいと思う。

● 図書館のあり方を考えたとき、中央図書館と区の地域図書館を混同して議論するのは中途半端でよくない。中央図書館と地域図書館を機能分けするという視点が非常に大切なのではないか。
● 地域ケアプラザ106館の読書環境を整えるために相談できる窓口が設置されるとよい。
● 未就園児を対象にしたおはなし会や、アウトリーチサービスにも力を入れてもらいたい。人員が不足しているのなら、カウンター業務から離れて司書にしかできない業務に力を注いだほうがよい。
● 人口と比べて図書館も司書の数も少ない横浜市の図書館が、図書館サービスの展開をしていくには、学校図書館や各地域の読書施設、市民利用施設とネットワークを密にしていくしかない。

■サービスポイントについて
● サービスにはコストがかかる。行政サービスの現状は、少子化等で経済面ではマイナスの方向だが、サービスについてのリクエストは増えている、という反比例した方向になっている。そのギャップを埋めていく仕組みを考えられれば、横浜モデルができるのではないか。
● ある程度のベーシックな部分は、行政のサービスとして当然予算を割くべきだが、プラスアルファの部分はオプションとして、お金を取ってもいい仕組みを作り、それをまかなっていく仕組みを両方作っていくことで、サービスを向上させ、続けていくことができる。
● 公共図書館の基本的な利用について代価を徴収してはならない、と図書館法にはあるが、展開の仕方によっては公共図書館で有料的なサービスが展開できる可能性はたくさんある。また、サービスのコストを増大させないで、きめ細かなサービスを展開させるために、市民の高度な能力を表面的には無料で利用させていただく、ということを考えていきたい。しかし、目先は無料、あるいはコストがかかっていないように見えても、長期的に考えた時に問題も出てくる。慎重な対応が必要だ。
● 図書館は、市民の知る権利を保障するためにあるのであって、それを保障するために図書館法がある。法律があるから無料であるということではない。お金のあるなしで情報に差をつけてはいけない。差をつけることによって知っている人知らない人が出てくると民主主義が成立しない、ということが基本ではないか。
● 市民が知りたい、読みたいということに的確に資料提供する。そこが図書館の専門性であるし、それによって市民や企業が助けられる。寄付を醸成するという意味を含めても、サービスに差をつけるのは、図書館とは何なのかというところからずれてきているのではないか。それを押さえないであり方を検討していくのはよくない。
● 現在の日本社会の法体系の中で、図書館が民主的な知る権利を支えているとは言えない、と法律の研究者は言う。横浜市の図書館を考えるにあたって、図書館の基礎的なサービスを中心として、そのレベルで考えていくべきか、あるいは基礎的なレベルはある程度実現できているから、さらに高度なレベルの図書館サービスを積み上げて展開すべきなのかどうか。
● 図書館の長い論争の歴史の中で、集会と展示は図書館の主要な機能の一つだと言っている。当時論争があった図書館は、地域のコミュニケーションの拠点となるが、そのとき図書館員が何をしたか、どういうスタンスで何を準備してどういう働きかけをすればよいのか。
● 図書館員が、誰かと誰かが出会うような働きかけを本に関わらずに一生懸命やっていて、図書館員はそれが自分の業務だと思い、図書館が考えていることを市民に知ってもらうことが大切だ。いい図書館は図書館だよりを必ず出している。
● 図書館のサービスはサーブ。図書館員がどういうサーブを出すかによって、図書館に花が咲くか咲かないか決まる。そのときに忙しいからとか、ニーズが少ないからと言っていると、いいサーブは出ない。
● 団塊の世代が退職して、図書館費の7割を占めている人件費がぽんと下がる。それでたたき上げの優秀な図書館長の給料を高くしてはどうか。

「効率的な管理運営」

■　管理運営の効率化について

●　資料を見ると、サービスとして図書館が本来すべき仕事へのサービスと、ボランティアでしているサービスとの整理がまだついていないような気がする。役割分担と責任・義務のありかをはっきりさせて、何段階かで整理できたら分かりやすいと思う。

●　経常的な民間委託による経費削減、というのが引っかかる。司書のプロ集団として、これから確立していくような方向で基本計画も作っていただきたい。

●　大学との連携をもっと深めるべき。欧米のようにインターンシップの質を高くして、優秀な人材を集め、能力開発をしていくのがよい。

●　横浜市として実行が難しい問題が出てきても、必要な場合は、懇談会の最終報告にそのことを書き込んで、今の制度上の壁になっているところを改正してもらう、ということが必要だ。

●　司書の役割として館内の仕事ももちろんあるが、同時に他機関との連携も大切。福祉関係や学校関係との連携は、プロの司書でなければできない。

●　管理運営の効率化については徹底的に考えなければいけない。直営、委託の拡大、指定管理者制導入等を検証するなかで、当面の方向性を出していくことが必要。

●　市民は司書のことをそれほど知らない。司書が必要でこういう機能を果たしている、ということを積極的に打ち出していくことが必要。

●　川崎市のカウンター業務委託の理由は、職員が専門業務をするためだったが、結局は職員が減ったために、レファレンスにはあまり回れていない。委託先に責任を負わせて質が維持できるのかどうか。カウンター業務は図書館職員のスキルアップにも必要。

●　指定管理者が入っているところはほとんど、横浜市よりはるかに今までのサービスが低かった。横浜市民が受けてきたようなサービスをそこの市民は知らないから、すごく良くなったと思っているだけで、まだ指定管理者の評価が出る段階ではないと思う。大きな枠組みを一旦崩すと元へ戻すのはとても大変なので、慎重にしたほうがよいのでは。

●　地域館の館長はもっと政策提言のできるスペシャリストになってほしい。横浜の弱いところだと思うので、そこの質を変えていくことでもっと効率的になるのではないかと思う。

●　藤沢市図書館は、図書館基本計画というビジョンがあって、その延長線上で大学と連携している。マスタープランをつくることが必要。

●　歴史に学ぶべき。「学校図書館に人ありて」という本に書いてあるが、昔、市川市の教育長が進めた、学校図書館をボランティアで地域に開こう、という計画が何故つぶれたか。

●　横浜市の図書館員も、今のままなら指定管理者と変わらないレベル。図書館員は自分で考えて自分で行動しているだろうか。指定管理者とは違うんだぞ、という職員を育てていただきたい。

●　指定管理者制度では先の見通しがたたない。職員は数年後変えられてしまうかもしれないので、積み重ねができないのではないか。パブリックの場合は特に、方針がころころ変わるようなやり方だけはとってほしくない。

●　次回、中間とりまとめという形を示して、それを元にこの懇談会の最終報告をまとめて、横浜モデルを明確にする、という形に持ち込みたい。

資料

・資料１　第４回　横浜市立図書館のあり方懇談会　議事
・資料２　委員発言要旨　－さらに討議を深めるために－

第６回　横浜市立図書館のあり方懇談会　議事

日時	平成１９年４月２４日（火）　午前１０時から正午まで
場所	横浜市中央図書館第１会議室
会議次第	・開会挨拶 ・新年度委員の紹介 ・前回議事の確認 ・意見交換「横浜市立図書館のあり方懇談会　中間とりまとめ」について ・閉会挨拶
出席者	高山座長、伊藤委員、井堀委員、金指委員、金澤委員、マリ委員、小泉委員、小宮委員、寺田委員、依田委員
欠席者	廣瀬委員
進行	・資料「横浜市立図書館のあり方懇談会　中間とりまとめ」をもとに、意見交換を行った。 ・新年度新しく就任した小宮委員を紹介した。 ・前回の議事を確認し、修正が必要な場合は事務局まで連絡することにした。 ・第７回懇談会は、５月１５日（火）午前１０時から中央図書館で開催することとなった。
意見	（●は委員のコメント） ●　アメリカのフィラデルフィアではいろいろな公共施設が夜10時まで開館している。大きな学会があると、図書館や資料館などでパーティまで開催し、公共的な場所としての活用をされていた。横浜も国際会議がたくさん開催されるので、横浜市立図書館でもそのようなことがあったらいいと思った。日本一の図書館と言ったとき、日本一をどういう定義で考えているのか。例えば「図書が一番多い」「サービスが一番いい」などが考えられるが、私は、例えるならば会社が上手に経営されているのと同様、うまく運営されていることが図書館のなかでの日本一だと考えている。サービスポイントを考えたときに、少数の人数のために1300万円を費やして行政サービスセンターなどのポイントを維持するのであれば、逆に1000万円でバスを買い、図書館員または補強する人を雇って、各地を網羅させて動くようなムービングライブラリーにするほうが、サービスがすみずみまで行き届くのではないか。加えて、「そこまでお散歩して本を選びましょう」などということで、市民がコミュニティを形成していくツールになることも考えられると思う。そういう工夫をたくさん考え、いろいろなことを試行錯誤しながら運営されていることによって、日本一になることがとても大事ではないか。 ●　この中間取りまとめで一番思ったのは、効率化に重きを置かれていて、官民協働などがメインになっているような気がした。やはり日本一の目指す図書館像をどこに持っていくかということがポイント。一番経費削減ができた図書館なのか、それとも一番サービスの良い図書館なのか、そのあたりが取りまとめの中で少し曖昧になっていると感じた。具体的な図書館像に向かってどういう方法で到達するかを考えることが、一番大事なのではないのか。もし効率云々ということであれば、会社を運営している立場から考えると、どこにお金がかかっているのか、どこにサービスの主点を置くべきなのか、カットするべきところはどこで、逆に投資をしていかなきゃいけないところはどこかを明確にする必要があると感じた。指定管理者制度などもそうだが、予算をいかにカットして少ない予算で図書館を運営するのかという意識が強いと感じた。 ●　中間取りまとめの２の中で「大正時代から蓄積した資料群」とあるが、例えば「４　効率的な	

管理運営」を行った場合、こういった貴重資料などの利用について、経験を蓄積した司書が今まで行っていたレファレンスのように、利用者が要求した資料が短時間で出てくることは継続可能なのか。自館の資料について熟知した図書館員の存在こそが、図書館の質を高めるのではないか。また、この取りまとめの力点の置き方について考えたとき、かなり疑問に思った。検討課題に入るのは構わないが、プログラムのように、例えば１９年から２２年までに市場化テストを導入・実施するといったことが明記されるような、そんな先に進んでしまっていいのだろうか、という懸念がある。

● 抜けていると思ったところが２点ある。１点目はグランドデザインが必要だということ。何を目指すのかということが検討されていない。例えば近くにサービスポイントがあるという図書館サービスを目指すということがあると思う。しかし、それを目指すのかどうかというのもグランドデザインに大きく関わってくる。市民力の育成というのが市民活動の推奨のところに出てくるが、図書館サービスの方向として市民力の育成ということをもっとアピールしていいのではないか。図書館が大事だということが行政サイドにも認識されることになるので、もう少し中間取りまとめでも出していくべきではないかと思う。2点目としては、専門職員によるサービスが一番効率的であろうということも共通認識で持ったと思う。その専門職員の力が発揮できる仕組みなど、もう少し検討していくべきではないか。あとは意見だが、「地域の特性に合わせた個性ある地域図書館」というところで、ブロック化をすすめることにより図書館ごとの個性を発揮すると書いてある。それに関しては、私は反対意見を述べている。「求められる」というようにはっきり決まったことのように書かれるより、「検討の余地がある」「更に検討が必要である」というふうに、他の意見もあったということを入れていただきたい。それから、管理運営のところで、非専門的業務を外部委託や臨時職員に任せるのが本当にいいのかということも、まだ検討課題だったと思う。

● 効率的な管理運営とあるが、タイトルとしてどうかと思う。効率化を反対する人は誰もいない。効率化と質の確保が相反するものではない、という視点が大切だと思う。その両方を追い求めるのがわれわれの役目。私が所管している地区センターについては、コストとか効率性という議論よりもやはり質の論議のほうが深まったのではないか。それは利用している人たちが審査員、選定委員になって、ただ単に書類を見るだけではなく、審査会でヒアリングやりながら試行錯誤してきた。今まで横浜市が作った任意団体でやるのが当たり前だったが、競争の概念が入った。しかし、競争というのは勝ち負けではなく、提案するということにすごく意義がある。それも市民も含めて提案書を作り、プレゼンテーションをしてやって理解されたなど、視野が広がった議論がされてきている。ですから、指定管理制度の良い点を使うというか、そういう議論も必要ではないか。図書館に何を利用するかということは別として、制度は理解していく必要があると思う。それと全体としては、この委員会は「あり方を検討する」ところだと思う。その「あり方」に対して中央図書館や各地域図書館がどういうふうに存在していくのか、その印象が非常に弱いと思う。もう少し、図書館としてどう存在していきたいということが明確になれば、そのあとにつながりやすいと思った。

● 私の仕事から考えると、やはり子どもとの関わりが大事だと思う。子供に読書活動をすすめていく、子供に本を読ませていくということが、これからの社会を作っていく、文化を作っていくという上でとても大事なことだと思う。昨年度、公立図書館と学校とのかかわりが次第にでき、教育委員会やＰＴＡとも関わって、読書フェスティバルというものを初めて１１月におこなった。読書フェスティバルで子供に本を薦めるということは非常に素敵なことだし、図書館と学校との連携が非常に良いとも思う。読書感想画コンクールの作品を中央図書館に展示して、多くの方々に子供たちの絵を見ながら、さらに親子で本を読んでみようか、というような形が勧められるといいと思う。また、学校には司書教諭がいるが、なかなか十分な活動ができないままに悩んでいる人が本当に多い。その中で、公共図書館の司書との方々の連携がいろいろな形でできれば、夢の実現（のひとつ）だと思う。

● ひとつはサービスの管理運営にも関わると思うが、既存施設の利用というところが全然どこに

も明記されていない。新しいものを作るだけではなく、現在ある地区センター、地域ケアプラザ、子育て支援拠点、いろいろな既存施設をもっと有効に活用してもいいのではないかと思う。もうひとつは、ボランティアの位置づけをきちんと取りまとめの中に入れれば、非常に分かりやすいのではないかと思う。それからもうひとつ、言葉で気になったことがある。多文化サービスの展開というところで、「母国語資料」と書いてあるが、国がない場合もあるので「母語資料」という言葉を使用したほうが良いと、どこかのシンポジウムで非常にもめたことがある。この表記がどのようにしたらいいか。以上３つである。

● 中村部長のボランティアの説明でひっかかったのがふたつあった。ひとつは「有償ボランティア」と「ボランティアの活用」という言葉。もうひとつは、団塊の世代の職員の再雇用という部分で、それが私たちの理解するボランティアと違うと感じた。一つめの、「有償ボランティア」は藤沢市の悪い例が過去にあった。それに「ボランティア」と「活用」という組み合わせはミスマッチで、特に役所が言うとミスマッチだと思う。二つめの団塊世代退職図書館員再雇用でとても気になるのは、今の図書館の世界の指定管理者制度の実態である。指定管理者の導入条件で１０年以上の図書館経験があることが入ってくるので、実態を見れば地方公務員の再雇用先になっている。それがこれからの若い図書館員たちの雇用機会をうばっているのではないか。

また、中間とりまとめの４番と５番で出てくる「効率的」ということがとても気になる。投資対効果を誰がどう判断するのか。それに協働というときには、加えて情報開示と行政の見方、この３点セットで官民双方向の働きかけがないといけないのではないか。そのためにも、私はぜひ図書館協議会を作って欲しい。図書館の政策をつくる小川館長や、専門知識を深めている専門職の方たちの考えを、市の財政や企画の方たちも同じように理解されるのは無理だと思う。そういうときにバックアップしていくような市民団体が、それも任意の団体ではなく、館長が委嘱して市民の代表として意見を集められる図書館協議会を作ればよいと思う。趣旨は配った紙に書いてあるとおり。横浜市立図書館の個性は、図書館協議会を持たないということになってしまわないかととても心配である。

● いろいろと難しいが、特に「３　これからの図書館サービス」と「４　効率的な管理運営」。３は今後図書館サービスを充実するときにどういう方向で行くのが望ましいか、という明るい方向だと思う。４は、予算が減ったとき、今までの図書館サービスを維持しようとすればどういう形で対応せざるをえないかという守りの話になる。横浜市の他の予算を削ってでも図書館に回すほうがいいと主張しても負けてしまうことがある。問題は、図書館サービスの質を落とすことではない。今までと同じ質を経費削減という厳しい状況の中で、目的は基本的に図書館サービスの質を限りある制約の中で維持する、あるいは向上すること。要するに「４　効率的な管理運営」で述べられていることは手段であるということがでてこないと、一般市民の理解を得にくいと思う。同じ予算のもとで、結果として図書館サービスが良くなるということは、時間的にも質的にも今まで対応できなかったサービスができるというプラスの面もあるはず。経費削減というと、そういうプラスの面も議論になると思うし、３との繋がりも見えてこない。

● 目的を明確化するためのグランドデザインを作るための第一歩として、どうすれば日本一の図書館になれるか考える必要がある。財政的な制約条件が強い状況の中で、効率的な管理運営について議論をもう少し深める必要もある。コストカットだけでなく投資も必要だ。事務局から、中間取りまとめのバージョンアップ版を次回ご提出いただきたい。

● 現在は図書館の代替的なサービスがいろいろあり、本を無料で貸し出すだけでは、納税者の理解が得にくくなってきている。アピールの仕方としては、民間でできそうな業務に関しては民間でやって経費を削減し、図書館の中で別のサービスに特化する。時間、立地等の条件は民間の方が自由にできる。窓口業務は非専門家を入れることで、専門と非専門がすみ分けられる。官と民がうまくすみ分けられれば、指定管理者制度も市場でうまく行くと思う。図書館サービスで時間、場所、人、職歴の面できれいにすみ分けができるかが難しく、一つのポイントになるだろう。

● グランドデザインがあれば、投資をするべきポイントがもっと明確になってくる。中間取りま

とめに欠けているのはスケジュール。いつまでに何をするか、期限を設定しないとなかなか実現できない。また、何にポイントを置いて、どれくらいの予算をかけていくべきか、現在は実際どのくらい予算がかかっているのかをはっきりさせることが必要。図書取次サービス試行事業についても、これだけ資料を出されても、話の論点が違う方向に行ってしまうような気がする。もっと数字が必要。数値とその努力目標がどのくらいということが分かれば、明確な形でいろいろな立場の中で方向性がまとまるのではないか。企業が赤字覚悟で何かをするというときは、代償として必ず何かを求めている。行政ではこれだけの人が利用している、ということが必要なのか。赤字で運営は続かないので、目的をはっきりさせることで、最終的にトータル的に見れば、ペイできなければならない。

● 図書館は会社とは違う。横浜市だけでなく、市というものが、図書館が自分の市民にとって何なのかということを、もっときちんと考えるべき。図書館カードを持つことは、本を借りる権利を持つと同時に公共財への責任を負うということで、社会に対する一つの教育であり、社会貢献活動でもある。119 人のために 900 万円というのは使いすぎ。（119 人は一日の平均利用者、900 万円は年間の図書運搬費）予算が足りないのであれば、常識のある人ならここから切るだろう。これに代わるものはムービングライブラリーではないか。リピーターから例えば 1000 円ずつで図書館会員になってもらえば、そこで資金ができる。アメリカでは図書館カードを有料にしているし、子どもが公共的なものを扱うことに対する教育としても当然。単なるサービスだから税金で運営されていてよくて、それがだめならば民間に、という、All or nothing という考え方は、おかしいと思う。市場化テストも 2、3 年試してみて駄目ならば、また違うやり方で考えればよい。

● 何のために図書館があるのか。ここでは貸出の話ばかり議論に上がっているが、ストックの問題がある。よい図書館は、市民から信頼を受けると、図書館への要求がどんどん大きくなる。図書館にはそのストックが必要。滋賀県八日市市の図書館では、以前受け入れていた市外利用者を締め出すことによって図書館サービスがタダではないことをわからせた。図書館は教育業務を背負っており、社会教育の一つの形である。いい社会を作るために、大人が勉強する機会を支える教育機関なのだと、教育基本法に書いてある。北欧の図書館ではお金がなくなると閉館時間を増やす。図書館が棚に向き合う川上の仕事がとても大事で、それを市民に見せ付けるというやり方もある。

● 市民に向けて図書館の理念、グランドデザインを広めていくということが一番大事。実際に図書館と関わりながら１５年間ボランティアをやってきたが、どういう形で手伝えるのが一番いいのかまだ結論がでていない。市民の皆さんの意見を聞きながら、図書館の効率化への支援・協力をしていきたい。

● 図書館の社会的な役割や教育の役割を否定する人はいないが、そこにあぐらをかいてはならない。横浜市は巨大な自治体で、公会堂、文化施設、スポーツ施設、みんな少ないと言われ、図書館も例外ではない。コストや人を使ってサービス改善しているのなら、それをどんどん出すべき。改善とか、ものを変えていこうということが、市民と共有できなければ、またあり方論とか教育論で現実の問題が進んでいかない。自らを変えて行こうというエネルギーを出発点として持っていなければいけない。その中にグランドデザインを反映することが必要ではないか。

● 例えば資料にある年間延べ 900 万人というのは大変大きな数値だが、延べ数であることを考えると、実際何人の利用者が利用しているのか、ということになる。例えば横浜市立図書館の利用登録者数が仮に全国平均の 25%前後だとすると、4 人に 1 人、360 万のうちの 90 万人しか使っていない、という話になる。市民の負担の公平化をどう考えたらいいのか。日本では行政の内部でも社会的にも、一部の人たちは非常に図書館を理解し、また図書館のよさを理解して使っているが、そうでない方々もまだ多い。

● 自分の市の図書館がどういう価値があるのか、横浜市がまず認識するべき。市民が何かを知りたい、学びたい、調べたいと思ったときに、そこにあったのだということがとても大事だ。図書館のあり方というのは、市が大事にしなければいけないことだと思う。大事にするのだから、もし財源が大変なら、財源を増やそうとする努力をすることが必要。寄付行為等ができる環境整備

	を市ができれば、寄付を一生懸命とってくるボランティアグループが出てくる。 ● 360万人市民がいる横浜で図書館のあり方を広めるのは難しいが、わかってくれる方が徐々に増えていると実感している。友の会も是非充実させていきたい。最終とりまとめでは、図書館協議会の設置を目指したい。市民サイドでも我々が望む図書館計画を作ることを提案したい。市民は図書館に何を求めているかということをはっきり打ち出しながら、図書館の職員と協力して何かよりよいものを作っていく場を設定し、継続的に市民と専門家の方も交えて協議していきたい。 ● 図書館側に市民を受け入れようとする姿勢があることが大事。このあり方懇談会のことも、図書館のことも知られていない。図書館が大変だという状況を公開して、みんなで考えていくべき。 ● 図書館は夢と希望が持てる場であり、社会教育の場でもあり、子供が育つ場、心が育つ場でもある。本があり、そして人がいることが大事。18の図書館にいる司書が専門性を発揮できるよう、学校の司書教諭と連携できるようにしてほしい。横浜市に学校が500校あるということをプラスに考え、大人にも子供にも使ってもらえるようにしたい。 ● 横浜らしい日本一の図書館を目指そう。そのためには具体的にどうするか。市民レベルが高い横浜の特性を生かし、市民の積極的な参加を大きな力にしたい。夢のある最終とりまとめに向けて、次回以降に反映させたい。
資料	・資料１　平成１９年度横浜市立図書館のあり方懇談会委員名簿 ・資料２　第５回　横浜市立図書館のあり方懇談会　議事 ・資料３　横浜市立図書館のあり方懇談会　中間とりまとめ ・資料４　提案競争型公共サービス改革制度ガイドライン ～横浜市における市場化テストの考え方の導入～ ・資料５　図書取次サービス試行事業について

第７回　横浜市立図書館のあり方懇談会　議事

日時	平成１９年５月１５日（火）　午前１０時から正午まで
場所	横浜市中央図書館第１会議室
会議次第	・開会挨拶 ・前回議事の確認 ・意見交換「委員発言要旨―さらに討議を深めるために―　４　図書館政策」について ・閉会挨拶
出席者	高山座長、伊藤委員、井堀委員、金指委員、金澤委員、マリ委員、寺田委員、廣瀬委員、依田委員
欠席者	小泉委員、小宮委員
進行	・資料「委員発言要旨―さらに討議を深めるために―　４　図書館政策」をもとに、意見交換を行った。 ・今までの議事を確認し、補足が必要な場合は文書で事務局まで連絡することにした。 ・第８回懇談会は、６月２９日（金）午前１０時から中央図書館で開催することとなった。
意見	（●は委員のコメント） ●　千代田区立図書館がメディアの注目を浴びている。「閉館時間が２２時」「図書館コンシェルジュの設置」「新しい検索システムの導入」「古書店等との連携」などに加えて「指定管理者による運営」がＰＲのポイントになっている。 ●　例えば学校のように地域の経営資源を投入することへ反対するものがいない、それくらい図書館も重要な施設なのだとＰＲしていくことが大切。 ●　実社会の中で図書館離れがすすむ原因の一つとして、インターネットや携帯電話のサービスで得られる情報が多くなったことがある。 ●　ＰＲも大切だが、その前にグランドデザインが必要。スタッフやサービスなどがあってはじめて、それをどういう風にＰＲしていくかを考えていくものではないか。 ●　図書館をアピールしていくには、説得力のある統計などのデータを用いながら、図書館としては今何ができていて、どのようになっているのかということを説明すべきだと思う。 ●　図書館というものの存在がすごくビジュアルでわかりやすいこと、図書館が単体で存在しているのではなくて、地域の中に常にアピールしていくことが大事である。 ●　図書館と市民の密度の濃いコミュニケーションによって、横浜市の図書館というのは自分たちの図書館なのだという市民意識が強まるのではないか。 ●　図書館サービスは、行政の一環としてのサービスではなく、日本国憲法や教育基本法などに則ったサービスであることを、図書館も利用者も、ともに思い出すべきである。 ●　図書館側からいろいろなアピールをすることで、市民自身が自分たちの図書館について考え、行動するという、市民力の養成にもつながってくると思う。 ●　図書館利用教育が足りないこと、あるいは図書館を使う機会が少ないことが、図書館に対する価値を見出す可能性を低くしているのではないか。 ●　常駐する専門職員がいる学校図書館で育った子供は、図書館の役割を理解しているし、公共図書館にも頻繁に通うという事例がある。

	● 図書館がＰＲする際、応援団になる市民をひとつ核として作るということが大事ではないか。 ● 行政の中で連携をしていくことが、ＰＲにつながると思う。 ● 学校で図書館を利用するとか本が好きだという生徒は、乳幼児の頃に読み聞かせをしてもらっている。乳幼児向けサービスも重点的に行ったほうがよいのではないか。 ● サービスや施設運営だけでなく、図書館が地域社会の仕組みとして成立しているかが大切である。 ● 横浜市は、人口規模から見ると県レヴェルに匹敵する。中央図書館は県立図書館の、地域図書館は市立図書館としての役割を考えたほうがよいのではないか。 ● 地域図書館に権限や自由度をもたせ、それぞれの地域にあったサービスをめざすことは、サービスの効率化にとって一つの有力な選択肢になるのではないか。 ● ある程度先進的な試みを地域図書館で試みることは、質の向上や効率的な運営につながるのではないか。 ● 新規に人を呼び込む努力をすれば、それは結果として効率的な運営にも役立つと思う。 ● 簡単に本にアクセスできることがコンピュータによって可能になったとすると、本を読むという行為や図書館で気持ちよく過ごすという部分が相対的に重要になってくるのではないかと思う。 ● 図書館あるいは情報を考えたときに、オーディオ・ビジュアル的なものをどのように扱っていくかという議論が必要ではないか。 ● ＩＴ技術的には可能なサービスも、どのように利用者に提供していくかは、窓口での運用の問題も入ってくるのではないか。 ● 「気持ちよい」「赤い」などの抽象的な属性を付与する場合は、より多くの人が付与したほうが、検索する際の手がかりも増えるのではないか。 ● 国際社会のなかで横浜市の特性を出すのならば、横浜美術館や開港資料館と連携し、横浜のひとつのアイデンティティとして打ち出すこともよいかと思う。 ● 国立－県立－市立図書館という、管理しやすいツリー構造で考えるのではなく、図書館の役割を兼務するようなネットワーク状の構造で図書館も考えたほうがよいのではないか。 ● 図書館には、厳かさやサロン的な要素など、いろいろな要素があっていいのではないかと思う。 ● 格差をつくるよりも、平等に図書館サービスを展開したほうが社会全体の活力も向上すると思う。 ● 図書館をサポートするメンバーであるからこそ、サービス以外の特典は必要なのではないか。 ● コンビニエンスストアのような図書館を作ることで、逆に、利用者が本などに「出会う場」「知の宝庫に向き合う場」を減らしてしまっているのではないかと思う。 ● 博物館法が改正されたように、図書館法にある入館料無料の原則のままでは、行政側は図書館に予算をつけないのではないか。
資料	・資料１　第６回　横浜市立図書館のあり方懇談会　議事 ・資料２　横浜市立図書館のあり方懇談会　中間とりまとめ　修正版 ・資料３　委員発言要旨　～さらに討議を深めるために～

第８回　横浜市立図書館のあり方懇談会　議事

日時	平成１９年６月２９日（金）　午前１０時から正午まで
場所	横浜市中央図書館第１会議室
会議次第	・開会挨拶 ・意見交換「最終報告」について ・前回議事の確認 ・閉会挨拶
出席者	高山座長、伊藤委員、金指委員、金澤委員、マリ委員、小泉委員、小宮委員、廣瀬委員、依田委員
欠席者	井堀委員、寺田委員
進行	・　資料２「最終報告書案」をもとに、意見交換を行った。 ・　最終報告は、作業部会（高山座長、井堀委員、金指委員、依田委員）で確認することとなった。
意見	（●は委員のコメント） ●　課題解決型の図書館の必要性と地域情報拠点としての位置づけ、この２つの視点がだされているのはよいことだと思う。 ●　以前に実施したアンケートを最終報告書にいかせると良い。 ●　ボランティアに関する議論が十分になされていないせいか、ボランティアについての表記が適切でない箇所が多い。 ●　図書館協議会の設置については、多くの委員が設置の方向で意見が一致していたと思う。 ●　多くの人が見る最終報告書なので、具体的に明示できるものは明示したほうが良いのではないか。 ●　市民の協力を得るには、図書館に何ができて、何ができていないかということを、統計データなどを明らかにして、説明できるようにするべきではないか。 ●　横浜市立図書館のグランドデザインを作る、あるいは、図書館の意義をもう一度見直して未来の図書館について考えていく、その仕組みづくりとして、図書館協議会を捉えていたと思う。 ●　最終報告書案に中長期的な視点を項目として組み込んで、図書館の具体像を明らかにしたほうがいいのではないか。 ●　この懇談会ではこれから先５年くらいのことを見通して話し合ったことがわかるような文章を最終報告書に盛り込んでほしい。 ●　図書は、人が憩う場所のきっかけ作り、コミュニティの形成の一手段としても有効なのではないか。 ●　地域情報の具体的なイメージがわきにくい。 ●　報告書の柱になるような文言は目立つようにしたらどうか。 ●　統計データで「人口一人当たり」という基準は、横浜市と他都市を比較する際、妥当なのだろうか。 ●　横浜市の特性を反映した図書館像を出したほうが良かったと思う。 ●　歴史の中、あるいは、社会の中での図書館の位置づけ、図書館の定義づけをするべきではない

	か。 ● 最多の市民に対して図書館の最も大きな便益が実現できるように、職員体制や財源確保などに関して発想の転換が必要だと思う。 ● ブロック制についてもう少し詳しく協議できればよかった。 ● 開港150周年は、図書館にとっても大事なものだと思う。 ● いくつかある提言を並列して扱うのではなく、メリハリをつけたほうがいいと思う。 ● 乳幼児向けサービスや子育て支援については、報告書の中でもう少し強調してほしい。 ● 報告書の柱の部分、あるいは、項目の表現については十分練り直してほしい。 ● 図書館のサービスが市民に周知されていない中に受益者負担を持ってくると、安易な有料化につながってしまうのではないか。 ● 学校図書館との連携も、互いに対等な立場で、というのが望ましい。そのためにも学校図書館の人材の配置と研修は必要ではないか。 ● 報告書が提案書の役割も担い、本来自治体がなすべきことと民力が導入されたときになされることの線引きができるようなものになるとよい。
資料	・資料１　第７回　横浜市立図書館のあり方懇談会　議事 ・資料２　横浜市立図書館のあり方懇談会報告書（案） ・資料３　横浜市立図書館のあり方懇談会　中間とりまとめ　修正版